

Platform

あなただけの
喫茶店

station

仮想と現実、
ひといき淹れて。

- VRChat : Home Cafe - MiniGreen
- cluster : まぶしい光の注ぐ場所
- NeosVR : Lotus Bay
- Real.W : 高円寺・旅する喫茶

Platform

Vol.7 contents

Gravure:KTNK 浮島Cafe4
Home Cafe - MiniGreen VRChat12
まぶしい光の注ぐ場所 cluster18
Lotus Bay NeosVR24
高円寺・旅する喫茶 Real.W30
あとがき36

第7号のテーマは「カフェ」。

カフェというのは無数のひとりが交差する場所です。お互い話すこともなく、ただ飲み物を飲み、あるいは軽食を食べて去っていく。ちょっとだけ長いすれ違いが起きる場所です。

しかし、珈琲や紅茶の匂いが、誰かがそこにいたことを教えてくれます。メタバース上のカフェではどうでしょう。仮想の匂いがしてきませんか？誰が、いや「何が」さっきまでここにいたのでしょうか。

そんなことを、珈琲でも飲みながら考えてみてください。

編集長

◀ To the next PLATFORM.



世界には、色んな町がある。
その町ひとつひとつに、駅がある。

どの町も駅もそれぞれ違っていて、
違った人たちがいて、
そこを訪れた僕たちが抱く思いも、
きっと違うのだろう。
……VRでも、Real Worldでも。

今はまだ離れ離れの「駅」を、「町」を、
あなたへ繋ぐ線路でありたい。

——それが「Platform」





Welcome



Private



あなただけの

喫茶店

へ。

to your
Cafe!



Menu

Restaurant

Hot	Cold
Americano 119	Cafe Frappe 129
Espresso 109	Smoothie 99
Cake Latte 119	Chai Latte 99
Doppio 99	Cappuccino 99
White Mocha 129	Frozen Milk 119

いらっ
し
や
い
ま
せ

*Flower,
Sea,
Sky.*



*...and what
would you like?*

Another cup of



Cute teacup.



Flower 

Okay, feel

tea...?



Sweets!

Ocean View...



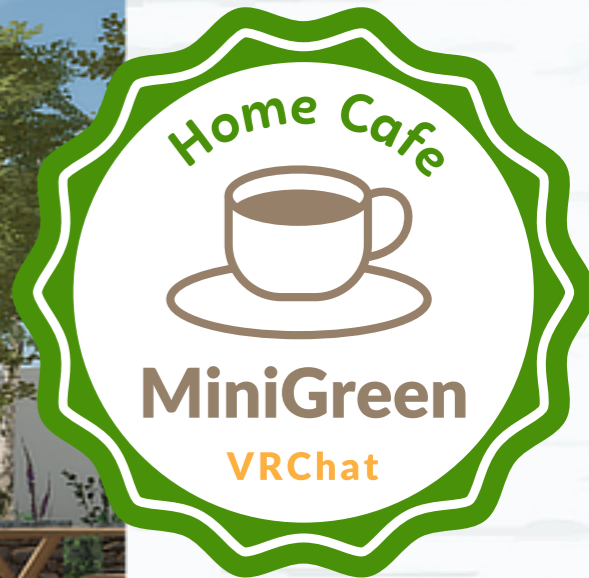
yourself at home.

またのご来店を、
心よりお待ちしております。

*We look forward to
welcoming you back.*

World: KTNK 浮島Cafe

Created by きつねこ狐猫



誰でも手軽に ホームカフェへ

ようこそ

ホームカフェへ

自 宅でカフェ、あるいはバーを開きたいと思ったことはないだろうか？ 少なくとも私にはそんな夢がある。

直接のキッカケは、両親に連れられて、立派な家のホームパーティーに何度も行ったことだろう。子供の視点では、どこでどう仲良くなったのが分からなかった、両親の友人のホームパーティーだ。

その家は、玄関を抜けるとバーカウンターがあって、レストランのように広々としたキッチンがあった。その家に住んでいる子供たちと、減多にしない0時を越えた

夜更かしをして、巨大なテレビで心ゆくまでゲームを楽しんだ。自宅も同然に大騒ぎできて、レストラン以上に美味しいものを味わえる。なんて贅沢なのだろう。

やがて、一人暮らしを始めてから思ったのは、ホームパーティーとはある意味で、自営業の飲食店を開くよりも険しい道だということだ。

高収入のエリートならばいざ知らず、自宅にバーカウンターを設置したところで、それを利用する日が年に何回あるだろうか？ それを『仕事』とするならば、疲れを癒しに来る社会人が何人かは来るだろうし、お金が稼げるならばモチベーションが高まる。しかし、せっかくの休日や、皿洗いや片付けのコストも背負って、忙しいことで有名な日本人たちとホームパーティーを？ 割とドライな思考をしている私は歳をとるにつれて、ホームパーティーよりも外食を好むようになった。



このワールドの敷地内にはくつろげる場所がある。色んなシチュエーションで楽しもう。

写真/Tokikaze





このワールドはバーチャルでホームカフェを楽しむために様々な機材が完備されている。泡を立てたカフェラテを作ることができる。

お腹が鳴りそうなのを抑えながら玄関を抜けると——ああ、カフェテーブルだ。家の中では、オシャレなピアノのBGMが流れている。キッチンにはバリスタやマグカップが備わっていて、シロップやミルクだって用意されている。マグカップに飲み物を注ぐ方法を覚えれば、フレンドを呼んですぐにでも「客」と「店員」でロールプレイができそうだ。

ホームパーティー（カフェ）、そして



すぐそこにわが家には

カフェがある

初対面の人とコミュニケーションをとるより、フレンドと一緒にカフェパーティを楽しむのはこのワールドの醍醐味だ。

ところで話は変わるが、ことVRChatでは接客イベントが流行っているのはご存知だろうか？ メイドのお茶会、本が読める喫茶店、ホストクラブ、キャバレークラブ等々。ほとんどは無料であり、接客する側もされる側も楽しみながら行うイベント。その意味では、「客」と「店員」に分かれて行うロールプレイングとも言える。それに、VRと言えども現実世界では自宅にすることが多いわけだから、これもホームパーティーと言えるのではないだろうか？

今回紹介するワールドは、そんなホームパーティーに打ってつけである。いや、イベントワールドではないので、初対面の人と濃密なコミュニケーションをとるのが苦手な人も安心して欲しい。ワールド名『Home Cafe - MiniGreen』、ホームパーティーならぬホームカフェを冠するからには、どんなワールドかもう想像がつくだろう。

ワールドに入ったならば、昼下がりの空の下、小鳥の囀りが聴こえてくる。塀で囲まれた敷地には、至る所にベンチやチェアが設置されている。木造のテーブルには、焼いた肉を置くべきか、それともチョコチップスコーンを置くべきか……妄想が捗るうちに、涎が出てきてしまいうさだ。

Would you like a drink?





テラスのそばには一杯のカフェラテ。テーブルの上に置くだけで写真映えるほどキレイ。

Home Cafe
- Mini Green
Created by
MiniGreen417
ACCESS
in VRChat

ロールプレイについてだが、これがVRだと結構楽しい。最近はどういう訳か、ただの物書きに過ぎない私が、ベテランのVTuberや声優に教わりながら、clusterの「居酒屋CLUSTARSしたため」の店長を務めている。ちようど夕食時に開かれる接客イベントなのだが、一緒に食事を味わうというのは、精神的にかなりポジティブな影響を与える。普段話している友人たちとも、カウンター越し、あるいはカフェテリアに共に座って話せば、意外な一面を見せてくれる。個人的には、「話し手」と「聞き手」のメリハリがつ

くようになって、いつも以上に話が捗る。とまあ、このような接客イベントを開かなくても、友人たちで「ホームカフェ」を開けば、十分に享受できると思う。自宅のような安心感と、友人と共にいる賑やかさとを、同時に味わえる贅沢を。そこに、アバターにエプロンを着けるなど一工夫すれば、VRならではの楽しみ、ロールプレイの面白さも加わるだろう。だが何よりも、友人と共に過ごすというのは、メンタル面で非常に良い体験なのだ。

何もそれは、共にコーヒーを飲む、共に夕食を味わうだけに留まらない。ワールドの動画プレイヤーを利用して、「隣」にいる友人とともに動画や配信を観る。これはかなり臨場感が高く、誰かが笑えば皆が笑ってストレス解消になるなど、良い意味での集団心理が働きやすくなる。何なら、プールだってあるしベットだってある。メタバースの旅行に疲れたときは、ここに立ち寄ってのんびり過ごしてみたいかがだろうか？

(文・sun)



ホームカフェもいいけど リゾート気分で 楽しんで

家でパーティーを楽しむのもいいけど、外のテラスでひなたぼっこしながらグラスを一杯飲んでくつろぐことも。リゾート気分で落ち着くのもあり。



←自分で作った飲み物を持ってお気に入りの場所で写真撮影楽しもう。





写真/ヤマノケ

を淹れる



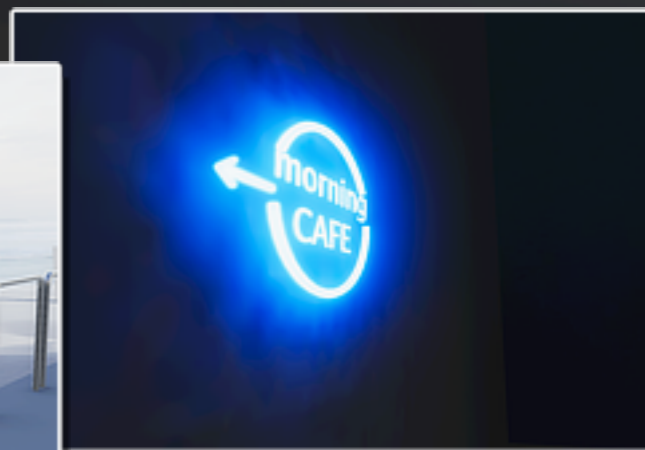
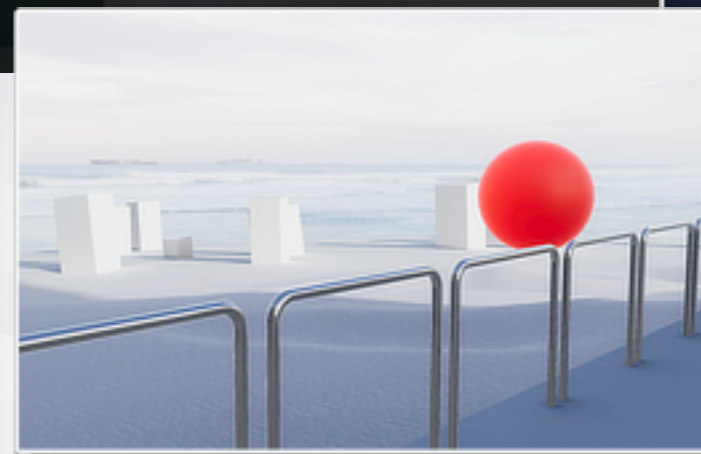
近頃は進取にカフェや喫茶店に赴くことも少なくなった。昔は漫ろな心を満たそうと、少しばかりの鹿島立ちかのよう(かしまだ)に弾む足を店まで運び、好みの産地のコーヒーを注文して、店内に漂う香りや雰囲気を吸い込み、紫煙を燻らせながらまったりと時間を溶かしていたものだ。それがいつしか仕事を片付けるためであったり、客先訪問前の隙間時間を埋めるためであったりと、何とも忙しない用途でしか訪れない場所となってしまうている。七月某日の夜半、デスクトップPCからclusterに潜った私は、本誌の記事を書くためというこれまたせかせかとした理由で、カフェや喫茶店を模したいくつものワールドを企画書をめぐるかのように巡っていた。



深夜に差し掛かりそろそろ一区切りかな、と電子煙草を吸い込みながらワールド検索画面をぼくと眺めていると一際真白のサムネイルを掲げたワールドに目を惹かれた。ワールド説明文には「カフェとモニター配置してみた」とあり、どう

現実世界で電子煙草を少し吸った後、ネオンサインに別れを告げて先ほど出迎えてくれたブロック階段の許へ向かった。階段へ近づくと、差し込む光の明度が増していく。突き当たりとなる階段を横目に左手を見ると、支柱を掻き分けるように眩い白が飛び込んできた。息を飲むほどの日の光に照らされ「ああ」と、何とも情けない声を上げてしまった。その声とともに何処となく張っていた気も解けて呆然と立ち尽くしてしまう。呆気にとられて持ち出してきたウエルカムコーヒーを零しかけ（ることはバーチャルの世界なのだからまあそうないのだが）慌ててカップを持ち直していると、白の空間の

いうにはあまりにも簡素な場所ではあるが、大きく貼られた鏡や切り取られた天井から差し込む光を受けて何とも言えない存在感を放っている。金属製のコーヒーカップを一つ拝借し、等間隔に凍と並んだアルミの欄干らんかんに寄って、赤色のモニュメントと浜辺に無秩序に突き出た真白のオブジェクトを暫く眺める。「朝だ」と、特に意図せず独り言ちていた。夕陽と形容したモニュメントを前にこんなことを呟くのもおかしい話だが、手に持つコーヒーと浜辺を照らす陽光、風が微かに肌を撫でているかのように感じるこの景色に言いようのない「朝」を想起してしまっただ。



やらカフェも併設されている場所のようだ。プライベートサーバー（ワールドへの参加を招待制とするもので、じつくり一人でワールド探索を行いたい場合に私はこの設定を良く用いている）を選択しワールドに足を踏み入れると、格子状に陰を落とす壁から突き出たブロック階段が出迎えてくれた。

ここは屋内のようで、左手から差し込む光に照らされ辺りの壁は少しばかり赤みを帯びているが、白を基調とした内装となっていて、モデルハウスや美術館のようなモダンな様相を呈している。振り向くと蒼白いネオンサインが薄暗い突き当りの壁に掛かっていて「モーニングカフェ」への道案内をしてきている。「おお、では早速ウエルカムコーヒーにありつこう」と突き当りを曲がると、薄暗い内装に切り取られた白浜の景色と、沈む夕陽のような赤を帯びた丸いモニュメントが見えてきた。不意に現れたコンテナポラリアートに暫く目を奪われていたが「あ、そうだコーヒー」と思い出し、左手の奥に目を遣ると瀟洒しょうしやなカウンターといくつかのコーヒーカップが少しばかりの光に照らされていた。カフェと

一角に、パステルグリーンの歪なモニュメントが二基、光合成をするかのように朝を吸い込み、伸びをすることに気が付いた。そこでふと我に返り「そうだ、あの階段をまだ上っていないな」と思い起こし、コーヒーを抱えてブロック階段へと向かった。

モダンなブロック階段を上り、建物の二階へ入ると再び明度を落とした支柱と白壁の通路が現れる。展望台へ向かう回廊のようなそれに沿って少しばかり歩くと、階下のフロアよりも更にひらけた、白を望む場所に辿り着いた。陽がじんわりと頬を照らし、柔らかい風が耳を撫でているように感じる。フロアの縁を見ると金属製のコーヒーカップが数個座って陽を浴びている。「ああ、朝だ」と何だか合点がいったような気分が満たされた自分がある。では、と私も縁に腰かけ、二杯目のコーヒーに手をかける。真白の朝を目一杯に吸い込んで私も階下のモニュメントのように暫し、光合成でもしよう。

明くる日、現実世界の私は、久々にお気に入りのお店のトロナ喫茶店へと赴いた。伊予柑のマーマレードをいっぱい塗ったチーズケーキを頬張り、水出し珈琲を堪能しながらこの記事の原稿を書いている。食べながら、飲みながらとまだまだ忙しいが、以前よりは幾分まとまりと時間を溶かしているように感じる。

(文・ヤマノケ)

まぶしい光の注ぐ場所 (by ニックウインター)

 ACCESS

← To the next PLATFORM.



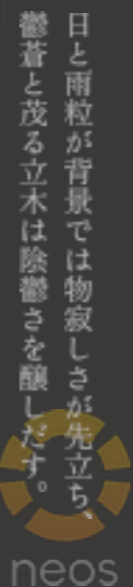
人間には二種類いる。物事の結果に意味を見出す人と、その過程に意味を見出す人だ。根っからの実用主義者の私は基本的に前者だけど、さりとて、旅の過程になんの楽しみも覚えなほほど野暮でもない。目的地へ向かう電車の座席での思ひ出、流れる風景、たまたま出会った人々。そうした過程は結果のスパイスとして時に不可分に混ざりあって匂い立ち、その思ひ出すべてを輝かせる。

お茶を淹れるという行為もまた、そういった類のものだと思う。喫茶という行為に何を求めるのかはその時々で変わるけれど、それが喉を潤したり体を温めたりという結果だけで語れるものでないことは説明するまでもないと思う。今日は何にしようかとその日の気分で茶葉を選び、お湯を沸かし、こぼこぼとポットへ注いで蒸らし、やがて色づいた琥珀色の液体を愛おしげにカップへ注ぐ。その過程一つ一つが、結果として一杯のお茶と渾然一体となつて、その時間を彩る。カフェで楽しむお茶にはそうした楽しみはないけれど、代わりにカフェに来るという過程こそが一杯のお茶に魔法をかける。そうした楽しみを味わえる仮想空間が「Lotus Bay」だ。



ただ、スポーン地点となるのは温かい店内ではなく、雨の降りしきる寒々しい薄暮のバス停だ。手元には雨傘もない。待てどバスが来る気配はなく、仕方なしに歩きだせば、待つのは白磁の水路に囲まれた煉瓦畳の公園だ。晴れていればさぞ気持ちいいだろうけど、暮れかけた

日と雨粒が背景では物寂しさが先立ち、鬱蒼と茂る立木は陰鬱さを醸し出す。あてもなく歩けば、雨音が心の芯まで染みてきて、体まで冷えてきた気がしてくる。そんな時にふと、公園の端にぽつんと立つ煉瓦造りの建物にたどり着く。



ストーリー・テラー Story Teller



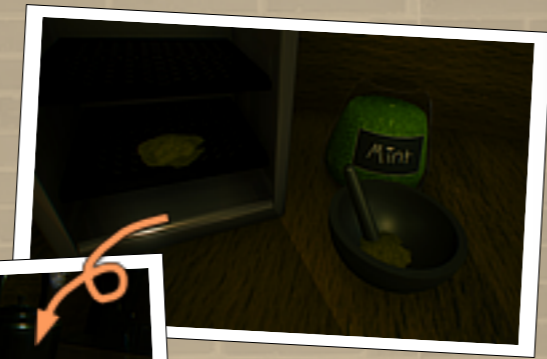
誘われるように扉をくぐると、チルなBGMが鼓膜を揺らす。シックながらどこか温かみのある内装。ゆらゆらと回る天井扇。そこはカフェ『Water Lily』。音を立てて扉が閉まれば、いつの間にか雨音は遠く、思わずほっとため息が漏れる。

店内はゆったりとした作りで、静かに時間を過ごせそうなボックス席と僅かなカウンター席、それに奥のソファ席。アクアリウムには落書きの魚が踊り、店内に静かに彩りを加えている。仮想空間の常として、店内は無人だ。さしあたってカウンター席に座ろうとしたところで、カウンター内にキッチンがあるのに気づく。小物まで手抜きがなく作り込まれている。店内がどこか暖かに感じるのには、こんな隅々まで店主の気遣いが染みているからなのだろう。思わずカウンター内に入って手に取ると、驚くことにそれはどれも「使える」品々だ。コンロ、ケトル、水道、ロースター、ポット、どれも使える。つまり、このカフェではキッチンの設備を使って、手ずからお茶を淹れることができる。

まずは茶葉をひとつまみ。ロースター



へ入れて焙煎する。出来上がりを待つ間、ケトルに水を汲み、電気コンロに掛ける。ほどなくロースターが止まる。扉を開ければ、香り高く煎られた葉の香り。熱が冷めやらぬうちに、それをすり鉢に入れ、細かくすりつぶしていく。作業に集中していると、気がつけばケトルがピイピイと笛を吹きだし、煮えた湯がくっつく音を立てている。よしよしと茶葉をティーポットにさらさら落としたり、沸騰の余韻の残るケトルを傾け、湯をととうとうと注いでやる。



How To Make Tea



やがて茶葉の香りが溶け出し、ポットの中には琥珀色の心温まる色合いが溜まる。



きっかりカップ二杯分。心待ちにしながら注げば、茶がゆらゆら仮想の湯気を立てている。

かつて私たちは、お湯を沸かすどころか火をつけることにすら苦労した。旅にも今の何十倍も時間がかかった。それが今や、私たちはスイッチひとつで湯を沸かせる電気ケトルのように、なんでも簡単に、短時間で、便利に済ませられる。楽に結果を手に入れることができる。けれど技術がどれほど進歩しても、私たちは過程なくして結果にはたどり着けない。そして心を真に満たしてくれるのは、結果ではなく、そこに至る過程そのものであることも少なくない。それは旅の途中で出会う事物であったり、お茶を淹れる作業であったり、あるいは一杯のお茶にたどり着くまでの雨の冷たさ、佗しさであったりする。

結果なき過程である仮想世界に佇むカフェ『Water Lily』。そこに物理現実の帰結としての一杯のお茶はない。けど、この店のお茶の味わいは、私たちが忘れがちな、なにか温かいものを思い出させてくれる。それはきつと、最上級のお茶にも劣らない芳醇なものだと私には思えた。

(文：思惟かね)

不思議な感覚だ。ここは仮想の世界、目の前のお茶はただの幻像で、結果であるその味や香りを楽しむことは叶わない。なのにこうしてお茶を淹れる過程だけで不思議なほど心満たされる。一息ついて席へ座り、無為とは知りつつ、カップを口元に運び傾けると、馴染みある香りを嚥下する記憶がこくりと私の喉を伝っていった。仮想の雨粒で冷え切った体を、琥珀色の液体が虚ろな熱で暖めていく。



Lotus Bay (by Team VibeZ)

ACCESS

To the next PLATFORM.





東京・高円寺にある「旅する喫茶」。
「旅」をコンセプトにした喫茶店。

基 本的に、予約をしてメシを喰う、ということ。「ダサい」ことだと認識している。メシというのはいつもの時間になったから食べるものと考えているし、そもそも、グルメじゃない私は、予約をして何かを食べるとしても、その味の良しあしがはっきり分かるかと言われると困る。
いや、そしてそれ以上に、「予約をする」ということに、なんとなくか、身の丈に合っていないという感じをおぼえてしまう。「予

約をする」必要がある飲食店ということは、そこは人気店だということ、私なんかが行っていないのか？と内なる私が高んども聞いてくる。内なる私はこうも言う。「どうせそういう店に行くやつらなんか、「予約しちゃった！」みたいなことをインスタに書き込んで、出てきたものをせっせと写真にとって、「めっちゃウマイ！」みたいなこと書くんだらう？そういうのが一番ダサイんだよね。本当に味はわかるのかね？「有名な

クリームソーダに

溶ける自意識

レトロでポップで可愛く、写真映えで人気のある、昭和レトロを象徴させるクリームソーダ。名店・旅する喫茶で食べに行った時のエッセイをつづりました。



旅する喫茶



お店の名物・クリームソーダ



Real World

写真／ニッソ編集長





右) にぎわいのある、高円寺のアーケード街。
左) メインストリートの裏通りにある、ビルの壁面。

とはいえただ待っていても仕方ないし、高円寺を歩いて時間を潰そう。高円寺と言えば小説にもなった純情商店街だな。とりあえず八百屋と魚屋のタイムセールが始まったので、近くの100円ショップに買って保冷バッグを買い、80円になっていたキャベツ(一玉)と500円になっていたメジマダグロを買った。まあ、少しの間なら

さて、今私は高円寺にいる。手には今回取材する「旅する喫茶」の受付表。10番と書かれている。QRコードを読み込むと現在何番の人が待っているかわかる方式だ。要するに、予約する羽目になったというわけだ。あー！悔しい！確かに今回のテーマ「喫茶店」ということで、オススメされた有名な所に行こうと思った。平日の昼間、しかもやや遅い時間帯だから大丈夫だと思った。人気店は格が違った。予約をしてメシを喰うことになった。なってしまった。というかよく考えてみれば取材なんだから、インスタに「めっちゃウマい！痧」って書くのよりたちが悪かった。

ようやく入れた「旅する喫茶」は10席ほどの小さな店で、クリムソーダとカレーを出す店だ。メニューを見ようとしたら「本日はチキンカレーのみとなっております」と言われた。おお、ストロングスタイル。それでは、と、チキ

これで大丈夫だろう。まだ時間がある。今度は純情商店街の反対側のアーケードを歩く。古着屋が多い。あいにく、ファッションには疎い私はその良さが分からないが、多分この輸入古着の店みたいなのはファッション界隈では有名な店だったりするのだろうか。メインストリートから外れた細い裏通りには、やっぱりマニア向けな小物屋や、よくわからない看板、なんかすごい壁面のビルがある。アーケードの古着屋のおしゃれさよりこういう道のよくわからないものに惹かれるあたりに、自分の感性のズレをひしひしと感じる。こんな感性のズレた人間が、感性が大事なエッセイなんて書いてて大丈夫か？



アーチが目印！
にぎやかな商店街

高円寺を歩こう

店にいる自分”を主張したいんじゃないのかね？”と。内なる私の声に耳を傾け、そうだそうだ。私はそういうやつらとは違う。そういうことは、私は絶対にやらないぞ。と、決心を固めるのであった。結局のところ、予約して食事をするということがなんとなく気恥ずかしく、勝手に羞恥心を感じているだけで、それを誤魔化すためにあたかも自分で決断して予約なんてダサイことをしないで！と大声(無論脳内でだが)で叫んでいるだ

けなのだ。世が世なら、いや、私が博学才穎、性、狷介にして自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしない人物だったら、きっと虎になるだろうほどの過剰な自意識が心の中に「内なる私」として住んでいる。自意識過剰。そんなこと、言われずとも自覚していますとも。まあいい。とにかく、私は予約をしてまでメシを喰わない！よっぽどの事でない限りは！



JR 高円寺駅



旅する喫茶

【住所】

東京都杉並区高円寺南

4-25-13 2階

【営業時間】

12:00 - 20:00

(夜喫茶営業日のみは

24:00 まで)

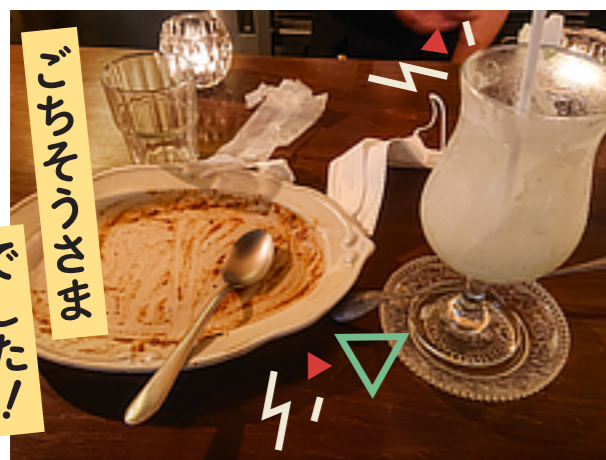
【定休日】 月曜日



「旅」がコンセプトの喫茶だけに、上には旅行カバンが積まれている。

かしスパイス系の辛さなのでさわやかな辛さだ。辛さの中にしょっぱさを感じる。辛さとしょっぱさという濃い味が口の中を支配しはじめた。そこでクリームソーダを一口。心地よい甘さが広がる。そしてまたカレーを一口。こんどはゴロリと入っているチキンを食べる。鶏肉特有の弾力を感じるが、固すぎず、問題無く噛み切れる。ウマイ！最初は「気取りすぎだろよ！」とか「なんで写真撮ってた内なる私も、クリームソーダとカレーの美味しさを前にしては無力だ。クリームソーダのアイスとともに、過剰な自意識が溶けていく…。

ふう。最後一口分のクリームソーダを飲み終え、一息つく。店を出て、駅に向かいながら考える。やっぱり、予約しないと食べられない店というのはそれなりの理由があるんだ。おい、内なる私。たまにはこういう風においしいものを食べたっていいだろ？ 思い出に残すために写真を撮ったっていいんだよ。わかったか？



ごちそうさま
でした！

(文・ニッソ編集長)

内なる私は少し黙ってから「たまにはなく」となげやりに言ってきた。

ちよっとだけ考えを改めよう。予約してメシを喰うのも「思ったより」ダサくない「らしい」。



旅先の食材を使った 自慢のグルメ

旅するをコンセプトにし、旅先で手に入れた地方の食材を使ったカレーとクリームソーダを作ってお店に提供しています。

ンカレーと一番オーソドックスなクリームソーダを注文する。待っているあいだ店内を見渡す。薄暗いので良く見えないが、「旅」というだけあって旅行カバンが置かれていたりする。カウンター席に座っているのだが、ろうそくがつけられていて手元を照らしている。内なる私がか言いか言い出しようだったから急いで口をふさぐ。

ちよっとするとクリームソーダが来た。おお、これは。クリームソーダのアイデアとも呼べるような緑色とアイス、やはりついているチェリー。はやる気持ちを抑え、冷静を装って写真を撮影する。そしてストローをさし、一口飲む。

「コレ」だ。何が「コレ」かは分からないが、このクリームソーダは確かに飲んだことがあるはずのクリームソーダだ。懐かしい、とも違う。おいしい、というだけではない。「コレ」だとしか言いやうがない味がする。

そしてようやくカレーが来た。チキンカレー。ご飯が上品に盛られているタイプ。こちらも写真を撮ってから食べ始める。辛い。し



station
Gravure : KTNK 浮島cafe

撮影 : Tokikaze



VR CHAT

Home Cafe -MiniGreen

執筆 : sun
撮影 : Tokikaze



cluster

まぶしい光の注ぐ場所

執筆&撮影 : ヤマノケ



Lotus Bay

執筆 : 思惟かね
撮影 : オージュ



高円寺・旅する喫茶

執筆&撮影 : ニツリちゃん



感想などは
#Platform通信欄

へぜひお寄せください!

ニツリちゃん
編集長

ほっと一息つきたいときにカフェに行くのはいかがでしょうか?とはいえ最近暑いですからね、バーチャルのカフェで休んでください。ちょっと休んでいる間に季節もかわり、次の停車駅「秋」に向かいます。お手持ちの切符をなくさないように。

思惟かね
編集/デザイン

正直おしゃれなカフェより、昔ながらの薄暗い喫茶店の方が落ち着くんですねー。ちなみに推しの喫茶店は池袋のワンダーパーラー。

SUN
ライター

先日、私にご指導ご鞭撻して下さる御方の別名義を知ったのですが、私が不眠症になっていた時に聴きこんでいた安眠ASMRの声優さんでした!?! 人生何が起こるか分からないものですね。

燕谷古雅
編集/デザイン

私が気になった「旅する喫茶」の2号店に行ってみました。まだ工事中でした。事前に公式ツイッターを見てなかったのは不覚…。

わく
ライター

未だに喫茶店のアメリカンとブレンドの味の違いが分からない。とりあえず美味そうに飲む表情だけは、年々上手くなっていく…。

ヤマノケ
ライター

ぼく、ぐあてまらがすき!

オージュ
カメラマン

珈琲OBの金魚鉢に注がれたソーダや花瓶に山盛りにされたパフェを見てから喫茶店の感覚が壊れた。

Tokikaze
カメラマン

喫茶店とカフェってほんの少し前までは明確な違いがあったんですね。僕はオシャレなカフェも薄暗くて渋い喫茶店もどっちも好きです。

Nag
校正

この頃は夕刻、仕事帰りに最寄かつ老舗の喫茶店でケーキをテイクアウトする人(ほぼNPC)として生きています。
※でもNPCになれる時間も大事ですよ、多分。

STAFF 編集長 | Editor Chief
ニツリちゃん
誌面デザイン | Design
思惟かね
燕谷古雅
校正 | Proofreading
Nag

執筆 | Writer
sun
ヤマノケ
思惟かね
ニツリちゃん

撮影 | Photographer
Tokikaze
sun
オージュ
ニツリちゃん
わく(裏表紙)

Platform Vol.7 【あなただけの喫茶店】

発行 : Platform編集部 (platformvirtualreal@gmail.com)

一版 (2023/9/10)

To the next JOURNEY.

2023. 9. 10

*Our
Journey
Continues...*

Platform

Vol.7

あなただけの
喫茶店